

ロシア資料による鹿児島方言の史的研究

久保 薫, 愛

<https://hdl.handle.net/2324/1440982>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

ロシア資料による鹿児島方言の史的研究

論文審査の結果の要旨

本論文は、18世紀前半にロシアへ漂流した鹿児島の少年ゴンザが関わって成立した、ロシア語と日本語の対訳資料である「ロシア資料」を中心に据えた、鹿児島方言の歴史的研究である。

まず、序章では、ロシア資料の特色及びこれまでの先行研究について述べ、本論文の目的について述べた。すなわち、日本語史研究におけるロシア資料の有用性を示すこと、現代方言とのつながりを考慮しながら歴史的観点から記述すること、鹿児島方言という一地方の方言史にとどまらず、他方言や中央語史も視野に入れた総合的な日本語史の構築を目指すこと、などである。

1章では、ロシア資料における動詞の活用を記述した。特にラ行五段化現象について、上二段動詞は一段化の進行が見られるが五段化が見られない、下二段動詞は一段化が見られないながらも五段化している例が見られる、といった興味深い事実を指摘した。このような相違について、九州方言全体を視野に入れ、上二段と下二段が置かれた環境の異なりにその要因が求められることを述べた。鹿児島方言史から日本語史を捉え直す契機ともなる、重要な論である。

2章から4章では、アスペクト形式について論じた。まず2章では、対訳資料が有する問題点を指摘し、それをふまえたうえで、当時の鹿児島方言として存在していたであろう「テアル」「テオル」という形式について記述した。「テアル」は主語が動作を受けて存在するという受身に近い意味を表すこと、「テオル」は已然態に類する〈状態〉を表すことを述べ、「テオル」は同時代の中央語「テイル」よりも文法化が進んでいることを指摘した。次に3章では、資料に見られる「テオル」「チョル」「トル」という3つの形式について、「テオル」と「チョル」は同じ意味を表す異形態であること、「トル」は〈完遂〉を表す複合動詞後項であることを述べた。4章では、ロシア資料及びその前後の方言文献に見える「連用形+オル」を分析し、「オル」が現代方言と同じ進行態及び過去の習慣の意味を持っていたことを述べた。また、現代方言の「ゴッ」という形について、語中のオの音価がかつて [wo] であったために軟口蓋化を起こした結果生じたものと推測した。文献学的考察をふまえ、音声学的知見を織り込みながら懐の深い論が展開されている。

5章及び6章では、否定を表す形式について論じた。5章では、ロシア資料における否定形式の体系を記述し、特に過去否定形式「チャッタ」に注目した。現代では「ン」を伴った「ンジャッタ」という形式へ変化していることを指摘し、これは、否定とテンスを分析的に表示しようとしたためであることを述べた。6章では、「チャッタ」の出自について、従来の「ズ+アリ」説を否定し、ロシア資料の表記から破裂の素性を持つ連用中止形「デ(ヂ)」を提案した。九州方言全体、さらには他方言に見られる事象も視野に入れ、説得力の高い結論が示されている。

7章では、「連用形+サマニ」という形式について論じた。中央語の歴史文献に見られる用法を丁寧に分析してその史的展開を記述し、現代鹿児島方言「セー」は、中央語と類似の用法を保持しつつ独自に発展したものであることを述べた。方言史と中央語史をつなぐ興味深い論である。

以上のように、本論文は、ロシア資料という難解な資料を駆使して鹿児島方言史を記述し、他方言や中央語も視座に収めた視野の広い論を展開している。学界に対して強烈なインパクトを与える成果であり、今後のさらなる発展も期待される。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つ者であると認めるものである。